

獣医学における実験動物学の今後

岡田利也

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科実験動物学教室

獣医学は、ヒト以外の動物を対象とした比較生物学的知識の集大成であり、動物の医療を根幹とする総合的な学問分野です。獣医学教育には、国際交流の活性化による動物の感染症や人獣共通感染症の脅威の高まり、食品・医薬品の安全性確保、環境の保全、生命倫理教育の充実などへの対応が求められています。近年、国際獣疫事務局（OIE）をはじめとする国際機関は世界各国の獣医師の質の向上・確保が喫緊の課題であると提言しており、我が国の獣医学教育においても国際標準化に向けた高度化が求められています。現在、全国の獣医系大学は、モデルコアカリキュラム策定による教育内容・方法の改善促進、共同学部・学科の設置など大学間連携の促進による教員の確保を含めた教育研究体制の充実を模索し、獣医学教育の改革をすすめています。このように獣医学は社会要請に対応するべく大きく変化しようとしています。

一方、実験動物学は実験に用いられる動物を対象とした学問で、実験動物を作り、増やし、使用方法ならびに動物実験に関する科学の研究と開発に関する学問です。実験動物を人の健康のため役立てることを目的とし、解剖学、生理学といった一定の方法論を持つ知識・研究体系とは異なり、多くの学問領域を包括する総合科学です。即ち、獣医学を構成する一つの学問領域ではなく、獣医学と同列の学問分野とみなすことができます。さらに、この獣医学と同列ともいえる実験動物学が昭和 58 年度に獣医師国家試験科目に加えられ、獣医系大学ではそれに先立って実験動物学の講義・実習等が導入されました。以後、実験動物学教育は社会的要請に応えるため、段階的に充実されてきています。以上のような背景、大阪府立大学における状況等を紹介しながら、獣医学における実験動物学の今後について、教育面に焦点をあててお話ししたいと思います。